

豊岡市教育研修センターだより

豊岡市教育委員会 R7(2025).9.3

No.7

豊岡市のホームページにもアップしています。

豊岡市HP→上段「くらし」→「教育・学校」→「教育研修センター」へ



豊岡市教育フォーラムより

教育フォーラムの経緯・意義について～東井教育の不易の教育観を大切にし、確認し合う研修会～

1市5町合併後、教育観を共通して貫くものが必要だと考え、東井教育を軸とした。

- ① 「子どもの事実に学び、子どもに寄り添う教育」…子どもの考え方、感じ方、思い方、行動の仕方等は子どものいのちの現れ、そのいのちに触れ、磨き、育てるのが教員の仕事であり、これは教育の不易。
- ② 先生たちの実践を大切にし、決して派手な取組でなくても値打ちある実践、子どもの命にかかわる実践といった尊い実践を大切にし、みんなで「観て、聴いて、感じて」学ぶ。

実践発表より

なかまとともに (奥田 麻衣子 先生)

○日々保育の中での職員同士の連携の大切さ

○幼児期の子どもたちにとって夢中になって遊ぶことが、学びの芽に！

いつだって〇〇〇は、□□□だ！ (岡本 怜奈 先生) ※〇〇〇=主人公 □□□=こども

○たくさんの学びと今の想い…①先生方の授業実践②子どもとの関わり方③保護者との関わり方④教室環境の整え方(今の想い) うまくいかなことだらけ、でも確実に、着実に。目の前の子どもたちと真摯に向き合うこと！

子どもの本当の気持ちに気づくことの大切さ (楞野 尚久 先生)

・大切にしていること…「何をするか子ども自身が決める」、「何に困っているかを丁寧に共有する」、「頑張り伝える」、「保護者と丁寧に連携する」

「豊岡のすてきな子どもたち～演劇ワークショップを日常に活かすために～」

平田 知之 先生



○演劇ワークショップ(小学校1年生、2年生)の活動一覧

- ① 1年生6月 ひとりでなりたいものに変身する。
- ② 1年生10月 チームでくじを引いたお題(動作)を表現する。
- ③ 1年生2月 チームでくじを引いたお題(場所)を表現する。
- ④ 2年生6月 OR 10月 チームでお題を考えて表現した後、無関係なキーワードかセリフを足して破壊的に再創造する。
- ⑤ 2年生10月 OR 2月 各自が役のくじを引いて、チームごとに全部の役が出てくるお話を創る。

○「演劇WS1年生 ① 1人でなりたいものに変身する」から

・この活動、できますか？ →子どもたちは、必ずしも同じスタートラインに立っているとは限らない。出来る、出来ないではなく「その子どものありのままの状態がどのような状態なのかを見取る」ことが大事。演劇WSは、普段の授業より子ども達の情報量が圧倒的に多い。例：人は顔から上は偽れるが、顔から下は偽りにくい。集合する時、どこに、誰と、近いか、遠いか、座り方は、手足は緊張？リラックス？、手はグーか、パーか。それをメイン1名、サブ2名のファシリテーターで見取る。逆に、普段の授業は、座らせて制限することで一人の先生で対応できる状況をつくっている。

・ワークショップの構成要素を一人一人に合わせて丁寧に調整していく

→「活動の調整」例：一人が無理なら大人と、もしくは友達と。急がずタイミングをはかる。

※やみくもに全員共通のゴールを設定するということは、非認知能力向上の視点では意味はない。

「共同体の調整」例：グループ分けをリーダー役等が均等にいるケースにするか、不均等にするか。
(演劇WSは、あくまでも発表できることが大事ではない) ある学校で、積極的な子どもたちのチーム、おとなしい子どもたちだけのチーム、そのどちらでもない子どもたちだけのチームで活動をした。発表の順番も自己決定、挙手なので一番におとなしい子どもたちだけのチームを当てた。そのチームは魚釣りのシーンを独創的に表現し、ファシリテーターがさらに言語化して価値づけた。それを見た、他の子どもたちはその世界と一体となっているようだった。

表現というのは、元気に明るく大きな声だけではなく、静かな時間、お互いを感じる時間ということが大事だということが分かった。演劇WSは、みんなで同じことをやっても個々の目標を設定しやすい。

・評価について①(創造的な評価) ➡子ども達の講評をする際、出来・不出来のジャッジをしない。何が見えたか、どう見えたかが大事、無理にほめない、創造的に意味付けをする。ある学校で、活動に参加しづらい子がいた。

演劇WS③の場所(ラーメン屋)の表現で、ただたずんでいた子の表現について、ファシリテーターが「大繁盛するラーメン屋においてある招き猫に見えた」と価値付けし、その子もまんざらでない表情を見せた。その8か月後、演劇WS⑤の難しいお題の時間で、その子はチームを積極的にリードしていた。

・評価について②(対等な人間として評価する) ➡自分の名前が書いてあるテープを自分の体に張ることから始まるが、自己効力感の低い子どもは、見えるところに張らない。足とか、背中とか。ある学校で、そういった子どもが多くいるクラスがあった。演劇WS①、②は参加できない子どもが数人いた。演劇WS③で参加した。演劇WS④、⑤となるにつれて、主体的に参加できた。その変化は、クラスだけでなく学校全体に広がり、挨拶や優しい雰囲気醸成されていた。後輩の学年のWSも、さらに主体的、創造的で、お互いの考えをアイコンタクトで共有し合うなどまるでサッカーの強いチームを見ているようだった。子ども達への対応として、向き合うことや寄り添うことはもちろんだが、押し返すことも必要。その子どもの状態による。

○「演劇WS2年生 ⑤ 各自が役のくじを引いて、チームごとに全部の役が出てくるお話を創る。」から

・さて、あなたならどうしますか? 「めっちゃ固いプリン」「クジラ」「いたずらする人」「台風」「めっちゃ切れるハサミ」が全部出てくるお話をつくってください。 ➡この活動の意義…どんな人が集まっても、そこにいるメンバーの特徴を最大限に、お互いの関係の中で引き出して、最高のパフォーマンスをつくるWS。我々大人の社会でも、こういった場面はあり、非認知能力の行き着くゴールはここだと感じる。非認知能力は個人だけの能力ではない。参加者全員が、それぞれ在りたい姿のまま活躍できる場をつくれる能力が、最大の非認知能力。最高のファシリテーターだなと感じた、ある学校の小学1年生に出会った。その子の級友への関わり方は、「相手の様子をじっくり見取って、一番いいタイミングでその人が活躍できることを提案する。でも無理強いはいしない。」ものだった。

子どもたちが、みんなが、それをできるようになったら、自律して学習をすることができるようになる。

○「学習観の拡張」について…行動主義的学習観(行動が変わる)、構成主義的学習観(対話や協働を通じて認知が変わる)、状況的学習観(参加の仕方が変わる:演劇WSを通して):参加ができるようになる

○【まとめ】演劇WSを日常に活かす ぜひ、以下の4点を参考してみてください。

- | | |
|------------|------------------------|
| ①普段と異なる見取り | ②活動、空間、共同体、時間、人工物を調整する |
| ③創造的な評価 | ④学習観の拡張 |

【参加者の声】

- ・ 共通するのは、一人の子どもを丸ごと受け止め、もっと理解したいと教師から歩み寄り、そばにいて自己選択・自己決定させている点。「みんな同じ」ではなく、一人一人の在る姿を理解することこそ教育の原点であるという東井先生の考え方が、若い先生の中にも脈々と受け継がれ、育っているのだと感じました。
- ・ 3名の先生の子どもの事実に学ぼうとしておられる真摯な姿勢が印象に残っています。教職の経験年数を重ねていくと「前は～だから…なはず」「～していたら大丈夫だろう」と勝手に決めつけてしまうことが多くなっていると気付かされました。子どもたちをよく観る、よく聴く、深く想像する、そして寄り添うことが教育の基本であると再認識することができました。
- ・ 若い頃の自分の実践と比較し、そして反省しながら聴いていました。みなと同じようにできないことを、子どもたちのせいにはせず、どんな事ならできるのかを考えたり、選択させたりしながら安心できる環境を創ろうと努力する姿に感動しました。

【豊岡市教育委員会より】

参加者の感想に「子どもの育ちを考えるうえで、どのように保育に携わっておられるのかを聞く貴重な機会でした」とありました。今年度から園小接続である「架け橋プログラム」が始まり、一人の大切な子を園小中とつないでいく視点がより強く明確になりました。3名の先生の実践の根幹にあるのは、豊岡市が大切にしている「子どもの事実に学び、子どもに寄り添う保育、教育」に他なりません。貴重な時間・空間を参加者の皆さまと共有できたこと、改めまして感謝いたします。先生方の地道で丁寧な取組が、豊岡の子どもたちの未来を創ることにつながります。

今年度から始まった第5次とよおか教育プランの基本理念、豊岡で育む「在りたい自分」と「在りたい未来」を創造する力の実現に向けて、学校、家庭、地域が手を携えて、子ども達の学びを支えていきましょう。

今回は、本フォーラムの内容を抜粋した動画を期間限定で配信しています。(市内の先生方のみ)

ぜひ、参加された先生方は自校の若い先生からベテランの先生まで本フォーラムの内容について共有いただきますようお願いいたします。